

夢に似しかの土曜日のつきかけは世をばたのしとおもひてしかとしみくと物思はする夕ぐれぞ淋しや暮れて逝くこの秋よ

かく許り世とははかなきものなりき一人生れてひとり死にゆく

及ひなきさひしさなりや人の子の世にのこされしあはれかなしみ

町はつれとふらひのむれはねりゆきて生のをはりの淋しさ見えぬ

オーロラのかけは東夜はあけて「今日」は來ぬれと逝きし君はも

雑司ヶ谷くぬきの花のさくところ眠れるたまよやすけくおはせ

野菊さき小さきむしは逝く秋のよことになきて御墓もるらん

燈臺の光は消えぬわたの原ゆくてのやみは波のみたかし

落葉と共に逝きたまひし

竹 内 久 子

秋の日落葉と共に逝き給ひし先生の面影は、静かな淋しき秋の様な方でした、先生も秋を好みて居られしが、其秋に世を去りし事のいと淋しく感じ候、先生は眞面目と正しい方で、一度逢た方に、懐しい感じを起させる方でした、それでも時々無邪氣な話をして、笑せる事があります、旅行と讀書は大好きでした、一時でも手をあかして居られる事は嫌ひでした、それに手紙をよく御書きになりました、夜分他より十時頃御歸りになりました、手紙を五六通おかきになり、日記をつけてから御休みになります、又客の訪問を受けましても、御留守でないかぎりには御目にかゝりました、草花も大好きでした、白き花はなほ好きでした、家庭にありては、愛心深き暖かき主人にて、主従も隔てなき美はしき家庭でした、私も時々旅行に、家庭に家族の一人となる事が、御座ります、それも今は思出の種となりました、先生の死は夢の様です、永き年月、師の御教を受

けましたが、其面影を忍んでは悲しき思出の、追懷に耽て居ります。

故大下藤次郎氏に捧げられたる弔辭

大下氏死去の報傳はると共に生前知遇を辱うした諸兄又は諸團體から懇篤なる弔辭の御寄贈に接しました一々本誌に掲げて御好意に答へる筈でありますが遺憾ながら紙數が許しませんから左に芳名を掲げて謝意を表して置きます。(次第不同)

目 白 僧 園 十 善 會

太 平 洋 畫 會

明 石 潮 畫 會

日 本 金 工 協 會

日 本 水 彩 畫 研 究 所 生 徒

河 合 新 藏 君

短歌九首

奥村 博

うつむきてしほれかゝりしダーリアよ

我が師の死をば汝も悲しむや

逝きし師を思ふ悲しさやるせなさ

のきには冷き秋雨の降る

雜司ヶ谷の森なつかしや師のみたま

在すと思へばなつかしきかな

此夕べ師の墓標をばくりかへし

くりかへし讀み又も涙す

逝きし師をおくらんが爲夜の汽車に

乗りて都に向ふ悲しさ

ひとり師のみ墓に行きてハモニカを

吹くがことさらうれしきかなや

栗の實をくひつぶしつゝ逝きし師を

思へりいつか涙こぼるゝ

おそ秋の淋しき晝をおくつきに

ひとり悲しむ吾を思へ師よ

師のみたまとはに安かれと此日頃

線香の香に親しみてあり